

止観家について

研究生 秋田 晃瑞

日本の中古天台期は、天台本覚思想の発展に伴い文献主義（教相主義）から観心主義（口伝主義）へと叡山の学风態度が変化をみせた時代であった。殊に口伝主義の発展は、自らの思想の優位性（他者との相違）を強調することから必然的に「流派」を形成するに至る。所謂密教においては川流・谷流を主として台密十三流、顕教においては恵心流・檀那流を主として恵壇八流の分裂をみる事ができる。この顕密それぞれの流派の分裂に伴い、戒律においても鎌倉時代に「戒家」という一派が現れた。ここである「戒家」というのは、学問的並びに実践的所属であると考えられる。戒家は衰退していた叡山の戒律を復興する為に立ち上がった、「戒律」を思想の根本に据える一派であるが、本題の「止観家」とは、この戒家の書物中に自家との対象としてその名がみられる用語である。はたして止観家という立場が、どのような状況の中にあるものなのかを概説的に捉えていく。

例えば仏教辞典における「止観家」の項では「古代比叡山に於て円頓の定恵を学びたる一派の称。戒家の対。」とある。戒家とは、興円の『一向大乘寺興隆篇目集』に「円宗、止観残^テ教無^ニ行證。円頓戒法有^レ受^ニ、無^ニ持相。」とあるように、当時の状況を嘆きこれを打破し、戒律を復興せんと立ち上がった一派である。戒家が自説を論ずるにあたり、

問題となるのは戒定恵の三学の関係についてである。戒家がいふには、戒定恵の三学の内、止観等の法門は定恵を基本としており、戒は定恵の方便としての立場でしかないと言われる。これに対して戒を根本とする戒家は、逆に止観を戒の方便とする思想がみられる。

その戒家の批判対象とは、一つには恵心流の教説を指すのであろうと思われる。それは尊舜の『二帖抄見聞』等に、敢えて事相の戒を遵守せずとも、内証の定恵が明らかであれば自ずと戒も持たれるとする思想を有するからである。戒家はこのような思想とは全く逆の説をとる。しかし戒家の書物には、恵心流・檀那流の用語とは別に、止観家の名称がみられる。これは恵心流とは別に止観家という批判対象がいたことを示しているとみてよい。用例が少ない為、止観家という一派を形成していたかどうかとも判断しかねるが、考察の結果として、止観家とは①戒家に対する形で恵心流そのものを指す、②恵心流に限らず檀那流も含めて顕教（止観業）全体を止観家とするが、戒家とは別である、③恵心流で述べられる戒についての見解が『摩訶止観』に依っていて、戒よりも定恵を重んじていることは明白である。そして争点となるのは基本的に戒に関する事項のみである。従って戒家は、恵心流全体を非としているのではなく、特に戒に関する部分だけをして止観家と別称している、④戒家が記家の教説をあたかも自家の教説のように扱うことがあるように、恵心流においても止観家の説を採用して論陣を張っていた、という四つの仮説を提示した。